

劇評： *The Pitmen Painters* by Lee Hall (Live Theatre, Newcastle)

秋田大学 大西 洋一

<Live Theatre について>

1973年にTim Healy, Geoff Gillham, Val McLaneらを中心に、イングランド北東部 (the North East) のタインサイド (Tyneside) で設立された Live Theatre Company。¹ この劇団の特徴は、「北東部」という地域的アイデンティティを重視し、地域に関わりのある芝居を、普段は劇場に足を踏み入れることのない一般庶民に伝えることを目的としていた点である。そのため、このカンパニーは、地域を題材に作品を書いた劇作家たち（活動初期においては、Tom Hadaway, C P Taylor, Alan Plater など）の新作を、地域内の非劇場施設（たとえば、公民館、労働者クラブ、パブや学校など）で上演することによって、人々を劇場に呼ぶのではなく、演劇を人々のもとに運んでいったのである。

1982年以降は、ニューカッスル (Newcastle) のキーサイド (Quayside) と呼ばれる河岸地区に本拠地となる小劇場 Live Theatre を構えて、劇団は活動を続けた。現在もウェブサイトで“a new writing theatre company”と規定するほど、新作戯曲の上演という基本方針は不動であり、それと同時に、北東部で生み出された作品をラジオや映画やテレビなど他のメディアに送り出すことにも積極的に関与している。近年は、後述の Lee Hall、詩人・批評家・劇作家として活躍する多才な Sean O'Brien、小説 *The Taxi Driver's Daughter* (2003) がブッカー賞候補作に選ばれた、今は亡き Julia Darling といった作家たちが作品を提供しており、イングランド演劇界において今なお独特の位置を占めている。²

さて、劇団の活動拠点である小劇場 Live Theatre であるが、古い保税倉庫の一角を借りて作られたスペースであり、老朽化し手狭になったため、改装および拡張を行うことになった。2006年春、Live Theatre に多大な貢献をした C P Taylor の代表作 *A Nightingale Sang in Eldon Square* (初演 1978 年) のリバイバル上演を最後に、劇場は改装期間に入った。そして、約一年後の 2007 年 9 月、新装成った Live Theatre のお披露目となる。“cabaret”タイプの座席（丸テーブルに 4 脚の椅子がつき、観客は飲み物を持ち込んで気楽に観劇できる）が舞台に一番近いゾーンに以前と同様に残っており、収容人員 160 名程度で、昔ながらの“intimate”な雰囲気は保たれているが、様々な設備は一新され、大変快適な空間として劇場は生まれ変わった。観客席の入り口近くには、“This theatre is dedicated to the memory of C P Taylor”という言葉が記されており、いわば彼からバトンを渡され、新たな時代の Live Theatre の幕を切って落とすことになったのが、Lee Hall 作 *The Pitmen Painters* である。

<The Pitmen Painters by Lee Hall について>

Lee Hall (1966-) は、世界的大ヒット映画となった *Billy Elliot* (2000) (邦題『リトル・ダンサー』) の脚本家として有名だが、彼と Live Theatre とのつながりは長く、深い。³ ニューカッスルで生まれ育った Hall は、少年時代から Live Theatre で演劇を見て大いに影響を受け、Cambridge 大学を出た後で劇作の道に入ってから、この劇団とつながりを保っていた。彼の戯曲集第 1 巻に収録された、代表作 *Cooking with Elvis* (初演 1998 年) を含む多くの脚本が、Live Theatre において何らかの形式で上演もしくは録音されているという。⁴ 今や国際的な名声を誇りながらも、北東部での経験と活動に裏打ちされた作品を書き続ける彼が、新世紀の Live Theatre を牽引していく存在として、こけら落としの公演を任されたのも至極当然と言えよう。

その Lee Hall が、今回戯曲の題材としたのが “The Ashington Group” である。それはたまたま彼が、古本屋で美術批評家 William Feaver の *Pitmen Painters: The Ashington Group 1934-1984* という本を目にしたことがきっかけであった。⁵

1934 年、ノーサンバランド (Northumberland) にあるアシントン (Ashington) の炭坑夫たちは、労働者教育協会 (WEA, Workers' Educational Association) が主催する夜間授業の一環として、「芸術鑑賞」のクラスを受けることになる。講師として Armstrong College Newcastle から招かれた美術教師 Robert Lyon は、ミケランジェロやレオナルド・ダ・ヴィンチについて講義を行うが、生徒の反応は芳しくない。そこで彼はやり方を変え、今度は炭坑夫たちが自ら絵を描くことを勧め、自分たちが描いた作品についてみんなに論評し合うことにしたところ、彼らは熱心に参加するようになった。その後彼らが、炭坑夫の見る日常、仕事の現場や生活の風景について描くようになると、労働者階級の自己表現を求める時代の風潮とも合致し、彼らは瞬く間に人気を博した。アシントンの炭坑夫たちの世界はたちまち広がり、芸術家を支援していた資産家 Helen Sutherland や、当代の芸術家 Ben Nicholson や David Jones などの知己を得て、ロンドンに絵画鑑賞の旅に出たり、展覧会を開催したりするが、彼らは炭坑夫としての生活を捨てることなく、あくまでも “unprofessional” として絵を描き続けたのである。

映画 *Billy Elliot* で、労働者階級による「文化」への参与の問題を描いた Lee Hall にとって、“The Ashington Group” という「炭坑夫＝画家たち」はまたとない題材であり、彼は William Feaver の研究書に記された事実に基づきながら脚色を加えていき、*The Pitmen Painters* を著した。一番大きな変更点は、実際の “The Ashington Group” には実に三十人ほどが属していたのだが、上演戯曲ではそれを Live Theatre 創設メンバーの一人 David Whitaker らが演じる五人の炭坑夫 (George, Harry, Jimmy, Oliver and Young Lad) に代表させ、各人の性格を明確化したことであろう。その五人に加え、彼らに影響を与える登場人物たち (美術教師 Robert Lyon、資産家 Helen Sutherland、画家 Ben Nicholson など)

を総勢八名のキャストで演じていた。

The Pitmen Painters の劇評はおおむね肯定的であり、実際に観劇してみて観客からも熱狂的に迎え入れられていることがよく分かった。人気の理由は多数あると思われるが、上演の特色としてまず挙げられるのは、スクリーンの効果的な使用である。画家および絵画を題材とした芝居であるため、絵をどのように観客に提示するかは大変重要であるわけだが、(設備一新の恩恵もあって) 登場人物が話題にする絵画を三つのスクリーンを巧みに利用して投影することにより、観客が絵画の世界にスムーズに入り込めるようになっていた。また、スクリーンは舞台上での美的構図を生み出すためにもうまく使用されていた。たとえば、美術教師 Robert Lyon が生徒の一人 Oliver をモデルにして実際に人物画を描く場面では、Lyon がキャンバスに実際に一筆ずつ描く Oliver の姿と、モデルとしてポーズを取る(役者による) Oliver の姿、そしてスクリーンに投影された実際に現存する Lyon 作 Oliver Kilbourn の肖像画を、重ね合わせるかのように並置する演出などが大変美的な効果を生んでいた。

そして、当然 Lee Hall の芝居であるから、観客席は笑いに満ち溢れていた。炭坑夫たちは“Geordie”と呼ばれる Tyne 川流域地方の方言で話し続けるのだが、とりわけ、美術教師と炭坑夫の間の文化的格差に端を発するジョークを騒々しいほどの剣幕で畳みかけられ観客は笑い転げていた。しかし、そのような笑いに満ちた騒々しい場面が、登場人物たちが思索をめぐらす落ち着いた場面と交互に現れるからこそ、有効であるとも言える。特に、笑いの後の静かな場面では、芝居の根幹に関わるような問題が扱われることが多かった。たとえば、Ben Nicholson の幾何学模様の抽象画を見て、それがあまりに観念的であるとみんなが呆れている時に、一人がその絵の中に形を、モノを、物質的な美を見出していく過程は、静穏のうちに進められた秀逸な場面であった。劇中で語られる“Art belongs to everyone”という言葉のように、モノに関わる人間も含めたすべての人間が美にあずかることができることを示した瞬間である。また、資産家 Helen Sutherland に、奨学金 (stipend) をあげるので画家を専業としないかと問われて Oliver がそれを断る場面も静かであった。Oliver が選んだのは、炭坑夫でありながら画家であるという道、“pitman”であると同時に“unprofessional”な painter として、労働と文化を日常の中で両立させる道なのである。

辛口の劇評(たとえば、Mark Fisher (*Variety* 4 Oct. 2007) や、Robert Dawson Scott (*The Times* 28 Sept. 2007) が指摘するように、確かに、一幕が終わればあまり劇的な葛藤もなく、ノスタルジックに振り返った過去の理想と共に物語は前へと進んでいくが、それは現代にまでは届かない。ただし、Lee Hall にとっては、この理想を“popular”な演劇において語ることから、Live Theatre の新しい時代を始めたかったのではないのだろうかと思う。

現在 Lee Hall は、Royal National Theatre の依頼を受けて新作戯曲に取り組んでいるということだが、今後はどのような題材を取り上げるのか、大変楽しみである。また Live Theatre も、これまで以上に様々な領域に力を入れるようなので、これから先どのような劇作家や作品が出てくるのか、ぜひ期待して見ていきたい。

注

1 Live Theatre Company の歴史に関しては、Live Theatre のウェブサイトである <<http://www.live.org.uk/>>と、*Live Theatre: Six Plays from the North East* 所収の Live Theatre 芸術監督 Max Roberts による“Preface”を参考にした。ちなみに、Tim Healy と Val McLane の姿は、ニューカッスルを舞台とした映画『シーズンチケット (Purely Belter) 』(2000年)で見ることができる。

2 これまでに名を挙げた6名の劇作家については、2003年に Live Theatre 活動30周年を記念して Methuen 社から出版された戯曲集 *Live Theatre: Six Plays from the North East* に、(Live Theatre との関連で上演された) 代表作が掲載されている。

3 以下は、Hall, *Plays: 1* の“Chronology”および“Introduction”、そして *Billy Elliot* の“Introduction”を参考にした。

4 映画 *Billy Elliot* の原型となった *Dancer* という脚本も、Live Theatre で上演されている。Hall, *Plays: 1* の148頁参照。

5 以下の“The Ashington Group”の記述に関しては、Feaver および *Catalogue of The Ashington Group* 所収の Feaver による“Introduction”を参考にした。なお、“The Ashington Group”の作品の一部は、Woodhorn Colliery Museum において常設展示されている。

参考文献

Catalogue of The Ashington Group: Paintings at Woodhorn Colliery Museum. Ashington: Ashington Group Trustee, 2006.

Feaver, William. *Pitmen Painters: The Ashington Group 1934-1984*. 1988. Manchester: Carcanet, 2001.

Hall, Lee. *Billy Elliot*. London: Faber and Faber, 2000.

---. *Plays: 1*. London: Methuen, 2002.

Roberts, Max, ed. *Live Theatre: Six Plays from the North East*. Methuen drama. London: Methuen, 2003.